

---

# 疾風伝

呪いのマリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

疾風伝

### 【Nコード】

N3101E

### 【作者名】

呪いのマリア

### 【あらすじ】

ヤバイ！！私暁抜け出してきちゃった！！運の悪い事にカカシに見つかっちゃった！！まじヤバイ！！どうしよう！！

暁を抜け出す??!! (前書き)

お読みください

暁を抜け出す??!!

里をでて3年……

サスケは大蛇丸と手を組んだらしい……

そして私は……

ばれる

構成員のほとんどがS級犯罪者と呼

暁に所属している……

暁とは謎の組織……かつて大蛇丸が入っていたが  
今は抜けたらしい

「零・青・白・朱・玄・空・南・北・三・玉」が一字ずつ刻まれて  
いる10個の指輪を暁メンバーが一人一人つけている

トビの話からすると指輪をはめると暁の正式メンバーの証とされ  
ている模様

私みたいな小娘がなんでこんな所にいるかと言つと

ナルト同様私が人柱力だからだ

とわ言つても私は10尾というあまり知られてない化け物だが

でも一応珍しい人柱力なので暁に捕らえられている

暁は人柱力を使つてなにかするつもりらしいが

私はなぜか生かされている

まあたぶん私の力を使つて里でも滅ぼす気なんだろうね・・・

10尾については私もよく分らない

私も知りたいと思わないし

そういえばナルトやサクラはどうしてるかな・・・

私は昔一応木の葉にいた

ちゃんとアカデミーも卒業してカカシ班の奴らと長い時間一緒にいた

7班の頃の私はずっとナルト達を警戒してたからまともに喋った事がない……

まあ今もその性格はあまり変わらないが……;;

久しぶりに行きたいな……木の葉……

「デイダラ………木の葉の里に行きたい」

私の言葉に目を見開いてびっくりしているのがデイダラ

・ 岩隠れの抜け忍で青い眼に金髪の特徴の男??（笑………

左眼は髪でかくれているがスコープがついている

一人称は「オイラ」。語尾に「…うん」を付ける

両手の平にある口で喰った粘土と自身のチャクラを混ぜて作った「起爆粘土」を用いる

これにより様々な造形品を作り……

粘土に混ぜるチャクラはC1からC4まで上げることができる

現在までに巨大鳥形粘土、蜘蛛型粘土、雀型粘土、百足型粘土、燕型粘土など……

他にも自分の口で起爆粘土を喰うC4カルラがある。

彼曰く「芸術は爆発だ」「クールアート」

彼にとっての芸術は「儚く散ってゆく一瞬の美」。

こいつは……本当の馬鹿だ（笑

まあうちが知ってるのはこのくらいけど・・・

「そっかーでもな香澄・・・無理だうん」

だよね・・・仮にも暁に捕らえられてる身だしね・・・

そう言うと思ってたよ

でもさうちが言う事聞くとと思う??

今夜抜け出しちゃお・・・

「ん?どうかしたか香澄うん・・・?」

いきなり話し掛けられてびっくりしたがここは平常心を保たなければ・・・

「いや・・・なんでもない」

そう言うとデイダラは「そうか?俺は任務にいくからなうん」って言うって部屋を出て行った・・・



「脱出開始」

暁にきずかれてはマズイからチャクラはあんまつかえないなあ・・・

・・・

壁を拳で吹っ飛ばすか・・・

・・・

音でばれるかな？

でもデイダラだってしょっちゅう粘土で建物壊してるし大丈夫でしょ

ドンッ！！！！！！ガラッラッラアッアッアアアアーーーー！！！！  
（瓦礫が崩れ落ちてる音）

「ヤバッこんなデカイ音でるんだ・・・」

たぶん逃げなきゃ見つかるな．．．．．いや確実に逃げなきゃ見つかる．．．．．

荷物を手短に用意し急いで空いた穴から出た

「ってか木の葉ってどっち行けばいいんだ??」

今更なんだけど．．．．．

まあこついつ時は!!!!

勘で行く．．．．．

(爆

「こつちかなあ．．．．．」

まあこんなふうになんかに走ってます；；

「ってか顔変えなきゃ!!!また暁に捕まったらめんどうだし」

「変化!!!!!!」

変化って言っても動物になるわけじゃありません・・・

私の髪は黒髪から赤い髪に変わり・・・・・・・・黒い目は緑に変わった

「よし！準備OK！！」

また勘で道を進んでたのはいいんだけど・・・・・・・・

今度こそ道に迷った・・・・・・・・

「おんなじ所ぐるぐる回ってる・・・・・・・・」

絶望的・・・

「おい！！お前ってばなにやってんだ؟؟？」

「ひゃあ！！」

ダレだよ！！！！

いきなり話し掛けんなよ！！！！

びつくりすんじゃねえかよ！！！！

つて・・・・・・・・・・その声は・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・

ナルト・・・・・・・・・・？・・・・・・・・

「え・・・・・・・・いや・・・・・・・・あの・・・・・・・・木の葉に行きたいんで  
すけど道がわかんなくて・・・・・・・・」

平常心なんて保っていらなかった・・・・・・・・

懐かしいサスケを抜いた他のメンバーが勢ぞろいだったから・・・・・・・・  
・・・・・・・・

「だったらついて来いってばよ！！！！俺たち木の葉の忍者で任務帰  
りなんだ！」

皆大きくなつたなあ……………

サクラあれから髪伸ばしてないんだあ……………髪キレイなの  
に……………

人の話なんか耳に入ってません（爆

「この子どうかしたの？」

サクラをずっと見てたらさすがにサクラにきずかれた……

「いや……………なんでもありません……………木の葉まで一緒にい  
かせていただきます……………お願いします」

そう言ったらナルトがうなずいてからこう言った

「俺の名前はうずまきナルト!!お前の名前は？」

2回目の自己紹介……………一回目は私は皆が嫌いだった

今もあんまり好きじゃないけど

「私の名前は・・・・・・・・・・」

ここで本名言っちゃっていいのかな・・・・・・・・？

いや・・・・・・・・言ったら後々面倒だよな・・・・・・・・

それにしても変化の術ってこんなにばれないもんなんだなー・・

でも偽名なんてすぐ思いつかない

・・・・・・・・・・「私の名前は・・・・・・・・・・赤坂 初音・・  
・・・・・・・・・・」

何も考えずに言ったらこういう名前になった・・・・・・・・・・（笑

「初音ちゃんね、私は春野サクラ！よろしく」

最初っから名前呼びかい・・・・・・・・偽名だから呼ばれても反応できないかも・・・・・・・・

「よろしくサクラ・・・・・・・・・・でいい？」

ここでボロをだしたら駄目ここは通りがかりのか弱い女の子を演じなきゃね・・・

「いいよ私も初音つてよぶね」

こんな自己紹介が続いて私が一番この中で恐れてる人の自己紹介が始まった

「俺の名前は はたけカカシだ」

・ カカシは勘が鋭いからなあ・・・・・・・・・・気付かれてるかなあ・・・・・・・・・・

「よろしくお願いします・・・」

でもそろそろ木の葉に向かいませんか？

「ほらナルト・サクラ行くぞ！！！！」

いきなりのカカシの声に皆一斉に走り出した

「また走るのがよお・・・・・・・・・・・・・・・・」

まあこんなの疲れたうちに入らないか・・・・・・・・

「君さあ・・・・・・・・何者？」

！！！！背後にいつの間にかカカシが！！！！

「えっと・・・・・・・・なにが言いたいんですか？」

ヤバイ・・・・・・・・ばれるかも・・・

楽しみたかったのになあ・・・・・・・・

「お前はどこの里出身だと聞いているんだよ・・・初音ちゃん」

カカシ・・・・・・・・・・・・・・・・笑ってるけど殺気があふれ出てる  
よ・・・



「私の出身は木の葉ですよ。カカシ先生」

ばれてるだろうが念のためか弱い女の子を演じつつけよう・・・

「木の葉があゝじゃあなんで初音ちゃんは額当てがないんだい？」

ヤバッ・・・うちの額当て横に傷入ってるからつけるわけにいか  
なかつたんだっけ・・・

なんで私の額当てに横線が入っているかと言うと

暁が私を無理やり捕らえたのではなく

私が自分の意志で暁に捕らわれに行ったんだ

だから私の額当てには里の裏切り者として横線が入っている

「それは・・・」

もう無理だね・・・暁に引きかえそう・・・

「ちょっと初音ちゃん・・・どこ行くの？」

カカシ先生・・・・・・・・・・

その手を離してくださいさい・・・・・・・・・・（涙

「ちょっと急用を思い出して・・・・・・・・」

・・・手がちょっと緩んだ！！！！！このすきに！！！！

「！！！！！！！！！！」

ヤベッ！この技は！！

と思った時には遅く・・・自分はその技の発動していた・・・

「生死楽霊！！」

この技は暗部レベルの技で

取得する事は極めて困難

この技にちよつとでも触れる奴が居たら体に風穴が開く

といつても今回は全然力を込めてないから内臓破裂ですむかな

まあ当然力カシは避けたがその後が問題だ・・・

この技は禁術のため下忍が使えるはずがない・・・

もう隠し通せないな・・・

「あの・・・？」

まあ・・・一応生きてるか確認・・・

ナルト達の姿はもう見えない距離にきている

「お前何者だ．．．．．？」

やっぱばれたーーーー．．．．

まあしょうがないか．．．．．

懐かしい顔見れたし楽しかったよ．．．．．  
先生．．．．．

「しょうがないなあ．．．．．私の名前は夜光香澄．．．．．ねえ  
思い出した??」

本名を口にしたらカカシはスゴイ驚た顔をした．．．．．

「香澄か．．．．．変化の術だな．．．．．お前いままで  
どこにいた??」

そこ聞かあ．．．．．

「先生には教えてあげるよ．．．．．知ってる?サスケは大  
蛇丸の所に行ったんだ．．．．．でね私は．．．．．暁に行  
ったんだよ．．．．．」

暁という単語にカカシは殺気を出した

「・・・・・・・・香澄・・・・・・・・お前木の葉を裏切るのか・・・・・・・・  
??・・・・・・・・」

カカシは深刻な顔で私を見てくる

「裏切ったのはどっちよ・・・・・・・・私が人柱力だからってなんで皆私  
と距離をおくの?・・・・・・・・私は何もしてないのに・・・・・・・・石を投げ  
るのはなぜ?悪口を言うのはなぜ?なんで皆私を恐れるの・・  
?小さい私は疑問でいっぱいだった・・・・・・・・でもね・・・・・・・・そんな時ナ  
ルトがいた・・・・・・・・同じ苦しみを知るもの・・・・・・・・そう思っ  
て私はナルトに心を開いた・・・・・・・・なのに・・・・・・・・」

カカシは表情を曇らせて話を聞いていた

「・・・・・・・・」

ずっとカカシは黙っていた

だから私は話を続けた

「ナルトは私と違っていた・・・夢があって明るくて皆を見返すんだってね・・・だからナルトには友達がどんどん出来た・・・また私は一人・・・同じ人柱力なのに・・・だからあの晩私は暴走した・・・その事件がきっかけで火影は私を恐れ暗殺を計画し始めた・・・だから私は暗殺される前に里を裏切り暁に身を置いた・・・だから裏切ったのはそっちが先でしょ・・・？違う？カカシ先生・・・」

そう言い残して私はその場を後にした

カカシが追いかけて来る様子はナイ・・・

「よかった・・・先生と殺し合いはしたくないんでね」

それにしても勘がよすぎだよ・・・

木の葉の一楽ラーメン食べたかったのに・・・

でもそんな事言っただけじゃないかあ・・・

「暁に戻んなきゃ・・・」

はあ．．．怒られるな．．．

「おい香澄！．．．！．．．！何処行つてたうん！．．．！」

やっぱり．．．．．

凄い血相で怒鳴ってくるデイダラ

唾とんでるって．．．汚いなあ．．．

「．．．．木の葉に行こうと思っただけ．．．」

ここは素直に言わないと怒られるから．．．

「木の葉か？うん．．．．今度任務で行くから一緒に行くか？うん．．．．」

．．．．．

デイダラがそんな事言つとは思わなかつた。。。

「うん・・・・・・・・いく」

早く行きたいな

まっててよ木の葉・・・・・・・・

私を敵に回すと恐ろしいって事を思い知らせてあげる・・・・・・・・



暁を抜け出す??!! (後書き)

ありがとうございました

木の葉に到着！（前書き）

お読みください

木の葉に到着！

デイダラが木の葉に連れて行ってくれると言って

もう早一週間がたとうとしている

「ねえ．．．デイダラーまだ木の葉行かないの．．．」

「んー今度一尾の奴で砂の里に行くからその途中で降ろしてやろうか？うん」

砂の里か．．．

一尾って我愛羅だっけ．．．

たしか一回中忍試験で会ったっけな．．．

「じゃあ途中で降ろしてくれる．．．？帰りは自分で帰るから．．  
でもあまりにも帰りが遅かったら迎えに来て」

今回も力カシにばれるかもしれないし

今度はどんな格好で行こうかな・・・？

この際変化しないで行くか・・・？

それも面白いかもね

「んで？その任務はいつ？」

なるべく早く行きたいな

「えーつと明日だっけなうん・・・」

ふっ・・・・・・・・いいタイミング・・・・・・・・

「じゃあ明日ヨロシク・・・・・・・・おやすみ」

そっぴい残して私はデイダラの部屋を出た

「そういえば四代目がこの前死んだんだけ・・・・・・・・？五代目は三

忍の一人だったわけ？」

どんな奴か楽しみだな・・・・・・・・

「さあ・・・もう寝るか」

明日は楽しませてもらうよ・・・・・・・・

<次の日>

「ネムイ・・・・・・・・」

寝すぎたな

デイダラはまだ居るだろうか・・・？

「デイダラ・・・」

そう言つて廊下を歩いているとあつちからデイダラが走ってきた

良かったまだいたんだ

「香澄もう行くぞうん！！」

荷物を持ちデイダラ自慢の粘土の鳥に乗った

数時間空を飛んでやっと木の葉が見えてきた

「デイダラー木の葉ついたからおろしてー」

下にはあんとかかれた大きい門

やっとなついた・・・木の葉

「香澄変化しないのかうん？」

「うん・・・このままの姿で皆に会いに行ってくるよ・・・やばかったらすぐ帰るから」

デイダラと口約束を交わし

私はあんと書かれた門をくぐった

額当ては新しくサソリに作ってもらった

サソリはそういうの得意だからね

もちろん額当ては木の葉

久しぶりだなこの風景

さあどこに行こうかな

「まずは一楽だね」

白ののれんに赤い文字で一楽

懐かしい

「おじさん塩ラーメンひとつ」

私がこの里をでて3年

私の顔をみて夜光香澄と分かる人はおそらくあまり居ないだろう

「へいおまち!!」

暖かい塩ラーメンをすすりながら次の行き場所を考えていると

「親父!!ミソラーメンひとつ!!」

.....来ると思ったよ.....ナルト

あまり目を合わせないように食べた



ばれないうちにさっさと出よう

「あれ?? お前見かけない顔だつてば?」

はあ……めんどくさい……

「こんにちわ、この前長期任務から帰ってきたばかりなの」

さて……名前どうしようかな

「へえー俺はうずまきナルトだつてばよ!! お前は??」

また自己紹介か

「私は香澄です」

あえて苗字は言わなかった

名前だけなら誰も気づかないだろうし

「それじゃあコレお代です。ごちそうさまでした」

ラーメンも食べ終わっただし次は四代目の墓でも行こうかな

「お前ってばもう行くのか？」

「ええ・・・それじゃあ」

足早に墓に向かう

四代目の墓は木の葉マークが刻まれていた

「おい・・・四代目・・・私はどうしたらいいんだ・・・  
・・・先に死にやがって・・・」

返事なんて返ってくるはずがないのに

「私・・・疲れてんのかな・・・」

先ほど花屋で買った花を墓に置く

「木の葉は私を裏切った………今度は私が裏切ってやるよ・  
……そこから見ても四代目」

さて……皆に会いに行くとするか

「ちょっとサイー！ナルトを怒らせないでよー！」

遠くからサクラの声がする

「ナルトくんにただ本当のことを言っただけですよ」

「こいつぜってーゆるさねえー！！！」

「ちょっとナルトー！！」

喧嘩か………

あのサイとか言う奴がサスケの代わり

「ふーん……」

サスケとか私が居なくても全然問題ないじゃん……

「やっぱり私は一人か……」

……。

「あ!! 香澄!!」

遠くからナルトに呼ばれた

「ナルトさん」

はたかも今気づいたかのように反応する

「そちらのお二人はお友達ですか？」

サクラとサイを見て私は言った

「ああこっちがサクラちゃんでこっちがサイ」

二人がヨロシクと言ってきたので

「香澄ですこちらこそヨロシク」

つと言っておいた

サクラは香澄という名前に少しだけ反応を見せた

「喧嘩ですか??」

「あーあれはサイがふざけた事言うからだってばよ!?!」

あー始まった

「だってそうじゃないですか、ナルトくんはなんでそこまでして2人を連れ戻したいんですか??」

サイの発言によくわからない事がひとつあった

二人って誰の事??

「あの・・・二人って言うのは??」

すると隣にいたサクラが

「元々私とナルトは7班に居たの、7班には私達と他にサスケ君それに・・・香澄が居たわ・・・でもその二人はある晩姿を消した・・・サスケ君が大蛇丸のところへ行ったのはすぐ分かったんだけど香澄の行方がわからなかったの・・・でもこの前私達の先生であるカカシ先生が香澄と接触した・・・香澄は暁に入ったって・・・だから私達はサスケ君と香澄を連れ戻す事を決意したの・・・まあそれが原因で喧嘩してるんだけどね」

馬鹿な人たちだ・・・私は木の葉に帰る気などないのに

「僕には理解できません」

サイはそう言い残して行ってしまった

その後をサクラが追った

ここに居るのはナルトと私

「ねえ・・・なんでナルト君は二人を連れ戻したいの？」

そついうとナルトは拳を強く握り答えた

「初めて出来たつながりだから」

つながり・・・

「ふーん・・・そつか・・・」

馬鹿だね・・・めんどくさい

もうここで正体ばらしちゃう？いつかはれるんだし

私を連れ戻そうなんて無駄

「やっぱ香澄はわかってくれるよな!!??」

「ばっかじゃないの……?」

「へっ……?」

「二人を連れ戻す?無理に決まってんじゃない……  
夢見すぎなんだよ馬鹿」

ナルトの顔がどんどん怒りへと変わっていく

「お前になにがわかるって言うんだってばよ!!」

わかるよ………本人だもん

「気づかないのか馬鹿ナルト………私は夜光香澄だ……  
・お前らが連れ戻すとかなんとか行ってる奴だよ」

あはは驚いてる

本当にナルトは面白いね



「暁はいいよ．．．．．私を化け物扱いしないし．．．．．私を裏切った木の葉と違ってね．．．．．」

ナルトの顔が険しくなった

「裏切ったってどう意味だつてばよ．．．??」

もういつか．．．．．言っちゃってもいいよね．．．

「私が暴れまわったあの日をきつかけに火影は私を暗殺すると言う計画をたてたのよ．．．．．生まれ育った故郷に裏切られるなんてね．．．．．」

さつさと帰らなきゃ．．．．．もう長居は許されない

「皆に伝えて．．．．．私は絶対に木の葉には戻らないってね」

ナルトは必死に私の腕をつかんで叫んだ

「なんでだよ!!なんでだ!!なんで暁なんか．．．．．」

・  
・  
「

あんたのそういう所が嫌いだよナルト・・・・・・・・・・

いつもまっすぐに正義なあんたは私には眩しすぎる

「じゃあね馬鹿ナルト・・・・・・・・・・また会えるの楽しみにしてるよ」

また会う日まで生きててよナルト

あんたは私が殺してあげる・・・・・・・・・・

木の葉に到着！（後書き）

ありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3101e/>

---

疾風伝

2010年10月11日08時17分発行